



第4回学校説明会 ⑧

『高校生チューター制度』について その4

本の説明文、3度目の紹介です。

「子ども自らが「絆づくり」を進める場として学校を再生していくための具体的プログラム。体験活動を通して社会性発達の核となる「自己有用感」を獲得させていくために、教職員はどのような環境や機会を整えていけばよいのかを、具体例によって解説。「治療的発想」から「教育（学習支援）的発想」に意識を切り替え、教職員が協力して「学校づくり」に取り組む際に求められる原則とアイデアを満載。」

体験活動を通して社会性発達の核となる「自己有用感」

このことが、ピア・サポートの理念です。

年齢差を活かした『お世話活動』を通して、自己有用感を醸成することを最重要の目的としたプログラムなのです。

高校生チューター制度には、2つの大きな柱があります。

自己有用感の醸成が、2つの柱のうちの1つになっているのです。

高校生チューター制度の導入によって、とってもし忙しくなる人が出てくるかもしれません。

いいえ、間違いなく出てきます。

それが、いいんです。

それが、チューターを成長させるのです。

チューターが、自分自身と向き合うことになります。

何のためという問いが、「生きるとは」という問いにまで昇華できるかもしれません。それを、社会人になってからではなく、高校生の時に体験できるかもしれないのです。

そして、そんな先輩たちの輝いている姿を、中学生が直に見つけることができるのです。そして、その中学生は、この学び舎で今度は、自分がチューターになるのです。

SGコースの生徒の生徒が中心となると書きましたが、全高校生が、中学生のチューターとして生活する学校になります。

明日に、つなげます。



わたしを束ねないで

新川 和江

わたしを束ねないで
 あらせいとうの花のように
 白い薔のように
 束ねないでください
 私は稲穂
 秋 大地が胸を焦がす
 見渡すかぎりの金色の稲穂

わたしを止めないで
 標本箱の昆虫のように
 高原からきた鉛筆書のように
 止めないでください
 私は羽ばたき
 こやみなく空のひろさをかいさぐっている
 目には見えないつばさの音

わたしを注がないで
 日常性に薄められた牛乳のように
 ぬるい酒のように
 注がないでください
 私は海
 夜 とほうもなく満ちてくる
 苦い潮 ふちのない水

わたしを名付けないで
 娘という名 妻という名
 重々しい母という名でしつらえた座に
 坐りきりにさせないでください
 わたしは風
 りんごの木と
 泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで
 ,(コマ)や(ヒリト*)いくつかの段落
 そしておしまいに
 「さようなら」が
 あったりする手紙のように
 こまめにけりをつけないでください
 わたしは終わりのない文章
 川と同じに
 はてしなく流れていく
 拡がっていく一行の詩